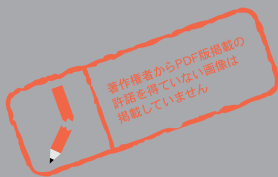


華氏451度。紙が自然発火する温度。ブラッドベリが、トリュフォーが描いたのは焚書坑儒の世界だった。近い将来、現実に紙にプリントされた本がその生命を終えるかもしれない。しかし、それはビットへの再生、さらには「本」が持っていた埋もれた「知」を再生する逆の意味としてだ。グーテンベルグの印刷技術によって作られた本が、アルダスによって広められたように。シリコンが融解する摂氏1410度まであと少し。

再生する「知の財産」



野辺名 豊・富田倫生
萩野正昭・浜野保樹
+ 編集部

Photo: Nakamura Tohru

デジタル書籍 成功の「カギ」を探る

出版ビジネスの起死回生

足並みをそろえつつある デジタル書籍の最新動向

紙からデジタルへ出版ビジネスが移行する。われわれにとってはまだ実感のわかない現象とも思えるが、この事実に直面するのはまぎれもないことだろう。しかし、これは出版社にとってみれば、低迷するビジネスの息を吹き返す活力へとつながる可能性がある。にわかに動き出した出版社の思惑はどこにあるのだろうか。

文：野辺名豊

他業種の企業と提携して 次世代の出版ビジネスを作る

インターネット上で、あるいはインターネットの伝送プロトコルを用いて、雑誌や単行本などのコンテンツを販売する「デジタル書籍」ビジネス。その実現への動きが活発になってきた。その背景には、出版業界自体が今、不況にさらされている危機感がある。エレクトロニックコマースなど新しい分野に目を向けないと「本を読む人」は少なくなるばかり、というわけだ。これがデータ配信なら書店が近くにいる人にもコンテンツを届けられる。また売れ残った本の在庫管理コストもバカにならず、電子化でのコスト削減が期待される。すでにウェブ上では、既存の書籍・雑誌の通販が本格化しており、代表的な紀伊国屋書店の「Bookweb」は年間約15億円の売上げを示している。

そこで、出版社は自社のサイトでのコミックや本の販売に力を入れる一方で、ECにノウハウを持っている企業と関係を深めようと動いている。この事業提携が、昨年末あたりから顕著になった動きの1つ。たとえば角川書店は東芝との共同出資で、デジタル出版などのコンテンツビジネスを行う新会社を4月に設立した。講談社もNECと凸版

印刷の支援を受け、6月にウェブマガジン「Web現代」を創刊している。実は出版業界はほかの業界に比べて情報化が遅れた面がある。そのため、コンテンツビジネスに手を広げたいメーカーの思惑と一致したプロジェクトが今後も増えていくだろう。

デジタル書籍の標準を目指す XMLにも注目が集まる

もちろん、一方で技術的な整備も見逃せない。中でも重要なのが、コンテンツフォーマットの標準化に向けた動き。マイクロソフトが提唱するXMLベースの「オープンeブック1.0」があるが、日本の書籍は外字や縦組みなど英書にない独特の表現があるため、独自のフォーマット作りが必要だ。そこで、ソニーなどが主体となる「電子ブックコミッティー」、小学館や講談社などが参加する「電子書籍コンソーシアム」など複数の団体が目次、本文、著者名、注釈など基本的なタグを含んだXMLベースのフォーマットを提唱している。そうした中で出版社や印刷会社など136社で構成する日本電子出版協会も、XMLベ

ースのフォーマット「JEPAX」を策定し、これを広く呼びかけていく。いずれにしても、フォーマットが標準化すれば既存書籍の電子化や配信のプロトコルが固まるわけで、デジタル書籍関連のビジネスが一気に活性化することもありうるのだ。

-Biz- Today

130社が参加するデジタル書籍プロジェクト デジタル書籍を配信する 実証実験が11月より開始

出版社を中心とした130社が参加する「電子書籍コンソーシアム」が、通信衛星とインターネットを使ったデジタル書籍配信の実証実験を開始する。従来のコンピュータが処理するテキストデータとしての「書籍」ではなく、紙の本をスキャンした、いわば紙とデジタルをつなぐ中間的な「書籍」が登場することになる。

文：野辺名 豊

- Biz - Today

高解像度の専用端末で
5000のコンテンツが読める

デジタル書籍ビジネスの気運が高まる中、今年の11月にいよいよ専用端末を使った電子書籍コンソーシアムの配信実験がスタートする。配信・販売されるコンテンツの募集はすでに7月末時点で締め切られたが、夏目漱石などの小説から学術書、コミック「ゴルゴ13」まで5000点弱におよぶコンテンツが出版社から寄せられた。実験では全国から500人程度のモニターを募集し、端末は無償で貸し出す。

この実験の最大の特徴は、シャープの開発した高解像度の液晶技術を生かした端末を用いることで、紙に匹敵する読みやすさを実現したことだ。パソコン画面上で見るコンテンツは、文字は読みにくかった。今回の端末は175dpiという高解像により、「ルビまではっきりと読める」(電子書籍コ

ンソーシアム 事務局 小林龍生氏) 大きさも一般の単行本とほぼ同じで携帯性を確保し、既存の本を読む感覚を狙っている。「従来のデジタルコンテンツは百科事典など情報がパラレルに独立した、検索ニーズの高いものが多かったが、今回は小説などストーリーのあるシリアルなコンテンツが多い」(小林氏)

電子書籍コンソーシアム
KJump www.ebj.gr.jp

スキャンすることで
過去の財産をそのまま生かせる

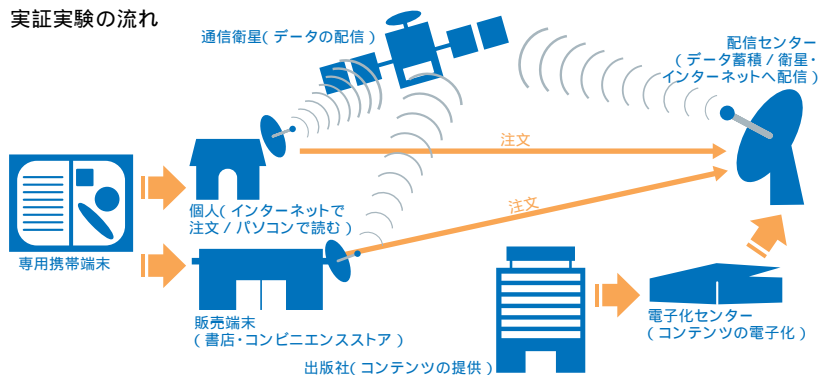
この液晶端末を採用することにより既存書籍の表現をそのまま再現できるというのが、もう一つのウリである。すなわち、既存の書籍をそのままスキャンした画像データがここでは配信される。したがって、テキストデータやXMLに比べ、データ自体のサ

イズは大きい。「コミック1冊分で10Mバイト程度」(小林氏)なので、確かに一般回線ではきつい。出版社から提供されたコンテンツ(書籍)は東京・上野の電子化センターでスキャンされ、データは「配信センター」から通信衛星を経由し、全国20か所の書店やコンビニに配信される。記憶メディアはPCMCIAのカードスロット+ATAフラッシュメモリ対応なので、書店で記憶メディアに落としてから専用端末またはPC(専用ビューワーあり)で見る。

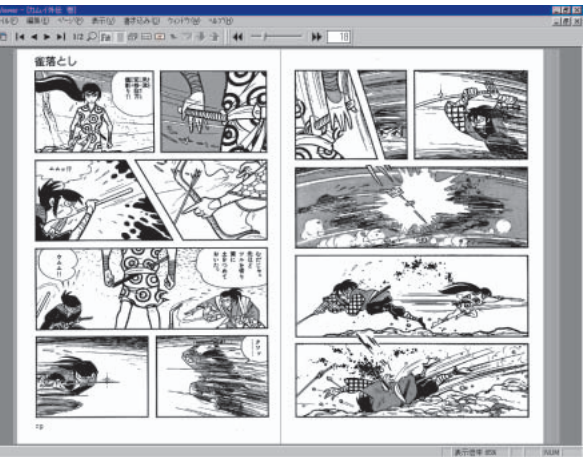
ただ、それでも出版社の立場にすれば、これは電子化に付随するさまざまな問題を解決した1つのモデルではある。XMLフォーマットの場合、既存の本は見出し、注釈、縦組みなど構成・表現がさまざま標準的なスタイルシートに落とし込むのは難しいところがある。「JISコードにない文字の問題などもある。原書を忠実に再現することで、そうした問題を解決した」(小林氏)というわけだ。

もちろん、一方で過去の書籍をそのまま販売するスキャン処理でいいのかという問題(出版後に新たな事実が判明することも考えられる。普通、リメイクするときは校正・改訂する)校正する場合のコストの問題がある。また「これは既存本のような再販商品にはあたらない」(某関係者)ので、ビジネスモデル自体が確定していない。しかし、それ以上に今回の実験に際しては、業界全体が注目している。これはユーザーに新しい出版文化を提起する作業であり、その先には再び業界を活性化させる大きな市場が開けているからだ。

実証実験の流れ



(左) 今実験のPC用のビューワーでデジタル書籍を表示。スキャンしたデータなので、マンガなどの画像中心のもの楽しめる。
(右) 専用端末で読むためのコンテンツは、書店やコンビニエンスストアの販売端末からダウンロードする。個人がインターネットを経由して注文することもできる。



電子書籍コンソーシアム・塚本代表に聞く

デジタル化が出版ビジネスそのものを変える

デジタル化されたコンテンツがインターネットで流通する。すでにこの動きは始まっているが、電子書籍コンソーシアムによって、デジタル化が遅れていた出版社も重い腰を上げるといった形となった。出版の未来に対しては、さまざまな意見があるが、電子書籍コンソーシアムの代表である塚本慶一郎氏はこの動きをどう見ているか。

聞き手：編集部

Q：インターネットでデジタル書籍を流通させることは、一般的なものになっていくのでしょうか？

A：一般的なものになるのかと言われれば、当然なと思いますね。

たとえば、青空文庫などの盛り上がりを見ると、自分たちの手で書籍の電子化を行うというコンセプトに共鳴したボランティアベースの人が素晴らしい活動をしていると思う。まあ著作権法上問題視する向きもあるようですが、やっている活動自体は素晴らしいと思う。

そういったことから考えると、いろんな方面でデジタル書籍的なものを求めている

人たちがどんどん出てきているわけでしょう。その流れは誰も止められない。個人的には2030年には紙の本がなくなると思っています。デジタル書籍が流行るかなんて話をする以前に、そのときには普通の本がなくなるんです。そこに至るまでの過程として2012年ごろには情報量の面でデジタル書籍が紙の本を超えると予測しています。その始まりがちょうどいまいろいろなところで起きているかなという感じで見ています。

Q：紙の本がなくなるといのは、携帯型のデバイスで読むようになるということを想

定しているのですか？

A：ええ。そのときのデバイスをどういう形にするのかはちょっとわからないのですが、いま普通に売られているようなパソコンではないと思っています。出版界からいうと、すでに一部の人はパソコンで本を読んでいるんだけど、目が疲れるし、使いにくいし、簡単に言うとか紙の本に比べて性能が悪いんです。パソコンの性能は年々倍に良くなっていったんですけど、それでも紙を超えていないんですよ。唯一勝っているのは重さと容量。たとえば百科事典10冊がCD-ROMに

になる。それから、ひょっとしたら複製という言葉自体の意味が変わっちゃうんじゃないかという考え方もある。それがまさにシエ

アウェアに結びつくわけなんですけど、そのシェアウェア的なものに本が変わらなければいけない。それに対していままでの著者の方が、それを理解・応援できるのかとか、そういう問題。それで、そういう著作権



2030年には紙の本がなくなる

入っちゃうとかね。そのほかでは全部性能が負けているんですよ。けれどもちょっとずついろいろなところで良くなっていて、重さの次は紙とレゾリューションが同じになるとかね。そしてパソコンと紙の性能が匹敵するのが2012年だと、一応の目処として僕は思っています。

Q：インターネットでデジタル書籍を流通させるのに障壁となるものは何でしょうか？

A：いま言われているのは著作権の問題。いままでは従来型の有体物を複製して頒布するという概念からきているわけでしょう。それでものがあって、複製によって数が増えて在庫になって、それをどう処理していくのかっていう経済活動から出てくる著作権の考え方ですよ。ところが複製コストがゼロ

の問題を解決するためには、いままでの“自分の原稿は紙になり、それを出版社が複製し、彼らが印刷機を動かして何冊も作るんだ。だからおれはそれに対して複製数に応じて印税をもらおうぞ”みたいな考え方から、“いや、いくらでも簡単に作れるんだからそれについてとか言う気はない。問題はその後、本が流行ったら何か別な形で御礼をしてもらおうことなんだ”という考え方に、著者の方が変わるのかどうか重要になってくる。これは多分、そんな急に言ってもけしからんとしかられて、いまはご理解いただけないと思います。

電子書籍の分野から新しい著書が出てきてその著者がいままでの著者がうらやむくらいの成功を収めたときに、いまいったようなシェアウェアモデルの電子書籍が普及していくかもしれません。

ダウンロードするデジタル書籍とビジネス デジタル社会が作る 現状と融合する新しい流通

出版物の流通は、再販制度や委託取次制度といった枠組みによって守られてきたといっても過言ではない。しかし、インターネットとデジタル書籍の組み合わせは、これまでの制度を変えていく恐れがある。技術は簡単であっても、制度を崩すのは至難の技である。書店、取次店の行く末はどのようなのだろうか。

文：野辺名 豊

流通の中抜きではなく 業界の環境整備とともに進む

さまざまなところで気運が高まってきたデジタル書籍化への動きだが、ユーザーにとって最大の関心はおそらく「書店に置いてある売れ筋本が、当たり前のようにインターネットでダウンロードできるようになるのか」だろう。ただ、極端な話、書店や卸売りを通さずに出版社のサイトからユーザーに直接コンテンツが届くような形になれば、いわば「流通の中抜き」になる可能性もある。実際にはそれは現実的ではなく、ビジネスレベルで言えば徐々に業界の環境が整備されながら進んでいくと思われる。

出版業界の流通形態を改めて説明しておこう。書籍の場合、年間4万点近い新刊、流通量の累計は40万点と言われる。出版物は一般的に出版社 卸売り 書店という経路でわたしたちの目に届くようになるのだが、この出版流通の大きな特徴は、出版社と書店との間の流通ルートとしてトーハンと日販（日本書籍販売）という2つの大きな取次

（卸売会社）が存在し、全出版物の9割近くを取り扱っていることである。出版の卸売会社もある意味では出版社以上に業界での影響力が強い。むしろ、大量の本をさばく紀伊国屋書店や三省堂のような大型書店の影響力も強い。

旧来からの制度と融合する 新しい流通形態を模索している

電子書籍やダウンロード販売よりも、「紙の書籍のインターネット販売」が現実的に先行しているのは、これが既存の流通の枠組みをそのまま利用しているからだという一面もあるだろう。たとえばトーハンのサイト「本の探検隊」で本を注文すると、最寄りの書店まで本が届けられ、買い手はそれを取りに行くシステムになっている。

さらに、「お金の流れ方」という点で言えば、ダウンロード販売は既存の書籍とはまったく異なる商品だ。出版業界は長い間、再販制（再販売価格維持制度）と委託取次制度という特殊な形態をとってきた。再

販制はある見方をすれば「書店が本の価格を自由に変えられない」制度。さらに委託取次制についてだが、取次は出版社が発行する初版部数を一度すべて買い上げる。次に取次は書店の規模などに応じて本を配本する。この配本数を設定する権限は実は書店にないのだが、一方で「105日」という期間内であれば、書店は売れ残りそうな本をいつでも取次に返品できる。さらに取次は6か月以内なら返品された本を出版社に戻すこともできる。

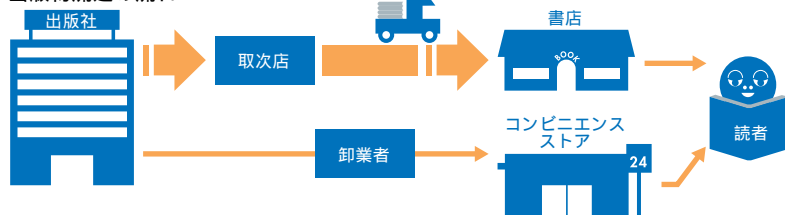
確かに最終的に出版社は返品部数分の金額を取次に払い戻す。しかし、見方を変えれば本がまったく売れなかった場合でも、少なくとも最初に本を発行する時点では初版部数に相当するお金が出版社に入る。これは経営の苦しい中小の出版社にとっては特に大きなメリットとなる。一転してダウンロード販売はそうした「一時的補償金」がなく、売れなければまったく収入が見込めない。つまり、出版社サイトからのダウンロード販売は、取次や書店だけでなく、出版社側にも「商品設計」上の課題が出てくる。出版社サイトによるダウンロード販売への極端な移行はハードルが多すぎるわけだ。

一方で電子書籍コンソーシアムのように書店を経由するやり方も出てきた。これまでの委託販売は本が売れなくとも出版社に一時収入が入るので、本が過剰に作られすぎるといって指摘もある。電子書籍の登場により、旧来の弊害を是正しながらこれまでのやり方に融合させていくことを、出版業界は模索していると言えるだろう。

本の探検隊

 tohan.gsquare.or.jp

出版物流通の流れ



出版物の流通を一手に押さえているトーハンと日販。この2つの取次店は日本で流通している書籍（雑誌・コミックを含む）の9割以上を扱う。近年は書店の大型化やコンビニエンスストアの出現によって、小さな本屋がなくなっているという問題もある。このような現在の流通事情がデジタル書籍の一般化によってどのように変わるかが今後の課題となっている。

【用語解説】

再販価格維持制度
メーカーが定価を決めて取次店や書店などに定価販売（再販売価格）を義務づけできる制度。一般には独占禁止法で禁止されているが、出版物は法で容認されている（法定再販）。ほかにも新聞や雑誌、音楽CDなどが法定再販となっている。

委託取次制度
出版社が書店に出版物を配本して販売を委託する。このとき書店は一定期間内であれば返品できる制度。書籍の委託には3通りあり、新刊委託の場合は105日間、長期委託の場合は4か月から6か月間となっている。雑誌は週刊誌で45日間、月刊誌で60日間の委託期間がある。委託期間の過ぎた商品は売れ残っても返品できない。

出版社と著作権者の思惑

デジタル時代の著作権と著作権料にまつわる問題

デジタル化は裏を返せば「いくらでも複製できる」ことになる。確かに紙を使った時代でも、コピー機を使ってコピーすることは日常で行われていたかもしれないが、デジタル化されたコンテンツは誰もが完全な形で複製できてしまう。そこで問題となるのが著作権だ。ここでは著作権料と併せてこの問題を見ていく。

文：野辺名豊

著作権を守る一方で 電子化権の確保が必要となる

電子書籍のビジネス化に際して業界が頭を悩ませている問題の根源は、「電子書籍はどんな商品なのか」という問いそのものにある。ユーザーは専用携帯端末で読むのか、パソコンで読むのか。ストーリー性のある小説が適しているのか、情報性の高いビジネス書が受けるのか。「電子書籍コンソーシアム」の件では対象として、小説から科学書、学術書、女性向けコミックまでさまざまなジャンルからラインナップしました。どのジャンルが電子書籍に向いているのが探りたい」（講談社 マルチメディア事業局デジタル事業統括部 吉井順一氏）というのは出版社の本音だろう。

そうした“得体の知れない”電子書籍であるがゆえに起こっている代表的な問題が著作権問題だ。1つは、ダウンロードしたデータはコピーの危険を伴うので、電子化の許諾を作者が渋るケースがあること。「著作権者の権利が不正なコピーによって不当に侵害されないよう、必要十分と思われるコピープロテクトの手段は講じています」（前出 電子書籍コンソーシアム小林氏）のと

り、電子透かし技術・コピープロテクション技術によるコピー防止は重要だ。

出版社側も著作権契約には神経をとがらせる。著者側の権利として複製権があり、著者の権限だけでデジタル化が可能だからだ。「刊行物ごとに結ぶ出版契約では、著者の複製権まで縛れない」（某出版社）。新たにデジタル化に関する契約を行う手間がかかる。とは言え、作者が個人で電子出版をして、既存の本が売れなくなるのは恐い。「出版社が一生涯、自分の作品を自分のホームページで公開できないように契約書押し付けてくる」と不満を言う作者がいる一方で、出版社側は既存の本を守る意味も含めた権利関係の確保に必死だ。「電子書店を作れば、デジタル化の出版契約を結べる。売上よりも権利確保が動機で電子書店を考える出版社もある」（某出版関係者）。

デジタル化によって 著作権料に違いを求めらるか

さらに、著作権料の話になれば、なおさらである。一般的に本の印税は10パーセントと言われ、電子化についても同じ印税を提示するケースが多いが、作者の中には「電子化コストは紙の印刷コストより安く、その分印税が高くていいではないか」と主張する人がいる。しかし、出版社にとっては実際電子化にどれほどコストがかかるかやってみなければわからないのが実状だ。「一般的に安いと言われるが、校正そのほか意

外と手間は食う。しかもどれほどのビジネスになるのかもわからない」（某出版関係者）。

これまでの出版物には、売れた単行本数年たったのちに文庫化・新書化という一種の“流れ”がある。単行本とは別の出版社から文庫が発刊されるケースもザラだ。「過去の作品のニーズが高いので、文庫化の先に電子書籍があるという発想がある」（某出版社）。だが、これはあくまで1つの考え方であり、実際はわからない。デジタル化の著作権料設定が難しいのは当たり前で、それ以前の出版社が新刊を作る段階の商品設計さえわからない。ノウハウさえできればある本が将来デジタル化されたときの売上げを、最初の単行本の商品設計から組み入れることも可能なのに、である。

結局、「さまざまなインフラや手段をユーザーに提示し、ユーザーが何を選択するかで動く」（講談社 吉井氏）という姿勢が的確であり、現状なのだ。

「13の質問」から出版ビジネスの未来が見える

大手出版社が考えるデジタル書籍のあり方

- Biz - Today

講 談 社 光 文 社 三 省 堂



明治42年11月創業。その長い歴史の中で築き上げてきた広範囲にわたる充実した定期刊行物のラインナップには定評がある。「週刊現代」「FRI DAY」などの総合誌、「TOKYO一週間」「Hot-Dog PRESS」などのヤング情報誌はもろんのこと、「MINE」「ViVi」「With」といった女性誌も充実している。



カッパノベルズ、カッパブックスなどのカッパの本や、光文社文庫などが数々のミリオンセラーを生み出し続けている一方で、「女性自身」「JJ」「CLASSY」「VERY」などの人気女性誌や、「週刊宝石」「FLASH」「Gainer」などの人気男性誌も発行している総合出版社。出版社による書籍ダウンロード販売の先駆。



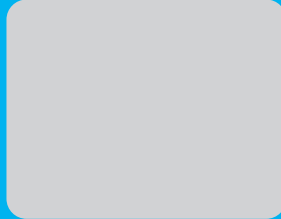
明治14年(1881)創業。辞書、教科書、参考書などの教育出版社として発展。「コンサイス」「クラウン」「新明解」は、だれもが知っている有名ブランド。近年は、書籍だけでなく、電子出版の分野でも活躍。電子辞書のタイトルも続々登場している。iモードやgooなど携帯電話やインターネットでも三省堂の辞書が使われている。

御社ではデジタル書籍の販売をしていますか？	テスト中です。近々正式に始めます。	はい。97年12月以降、現在5店舗(二フティサーブ、ビッグロブなど)で営業中。	凸版のコンテンツパラダイスで販売をしています。
実際にいくつかの出版社によって電子出版が始められている現状をどう見えていますか？	まだまだ、いろいろと解決すべき問題はありますが、流れとしては当然の方向と考えています。	読書人口の高齢化や少子化を考えれば、電子出版はその対応手段の1つ。出版社が取り組むのは自然な流れ。	インターネットの普及にともない、電子出版はますます発展する。表現手段の多様化で、必然の流れと理解している。
出版社にとってデジタル書籍のメリットとは何だと考えますか？	著作物を、形態が変わっても提供し続けることができること。将来的には製作・流通コストの削減。	紙の本を読むには目が不自由な高齢者や、ゲーム感覚で電子本を楽しむ新読者層が生まれること。絶版、品切れがなくなること。	在庫を持たないこと。部数の少ないものでも出版が可能。絶版にすることなく長く販売することも可能。
読者にとってデジタル書籍のメリットとは何だと考えますか？	コストメリットが当面は大きいのではないだろうか。全体の点数が増えれば、欲しいときにすぐ手に入る利便性も出てくると思います。また視覚障害の方が音声ソフトで聞くといった利用も、デジタルデータならば可能になります。	文字の大きさなどを好みのスタイルに変更できる自由度の高さ。ネットワーク使用による、時間・距離に影響されない利便性。デジタルならではの小スペースなど。	買いたいときに購入できる。手ごろな価格で買うことができる。書籍の整理が容易。(出版社にも言えるが)紙の使用がなく、地球環境に寄与。
デジタル書籍が紙でできた書籍と置き換わる時代がやってくると思いますか？ Yes / No 理由 :	No。 メディアが違えば利用方法も違うから。テレビが出現してもラジオが消えなかったことと同じだと思っています。紙は安く手軽で便利です。お風呂に入りながらでも読めます。紙のコストが上がれば別ですが。	Yes・No両方。 内容によって媒体は「淘汰」されていくと思います。	No
デジタル書籍にするなら、どのような形態(内容も含めて)の出版物がいいと思いますか？	現在のところは、テキスト中心で、情報性より作品性の強いもの。情報性の高いものは時間がたつと陳腐化して内容の改訂が必要になります。たとえば、いまウィンドウズ3.1関連の書籍をコストをかけて電子化することは、あまり意味がないと思います。図版の多いものも、ネットワーク全体のスピードから言って、まだ辛いものがあると思います。	まだまだインフラが脆弱なので、いまのところテキストデータ(の一部)で表現できる小説系が最適だと思います。	ビューワーによるところが大きいですが、その制約を除けば、どのような内容・形態のものでもよい。電子でということ考えると、検索性の高いデジタル書籍は今後可能性がある。
インターネットでデジタル書籍を配信する際の障壁は何ですか？	1.外字や記号を含めた文字コードの問題。2.不正コピー防止など著者の権利保護の問題。3.課金と読者のプライバシー保護の問題。4.上の回答でもあげたネットワークのスピードの問題。5.さまざまなフォーマットが混在する問題。6.校閲を含めた製作コスト・手間の問題。	ネットワークインフラの脆弱さと通信料金の高さ。パソコンの使い勝手の悪さと値段の高さ。少額決済システムに選択肢が少ないこと。メールによる読者サポートの大変さ。	データ量。データのプロテクト。課金の問題。
もし電子出版で販売しているデジタル書籍があれば、そのジャンルとタイトル数を教えてください。	小説：近々20タイトルほどで正式にスタートすべく準備中。コミック：海外在住の方向けのサービスを研究、準備中。雑誌：1タイトル。その他：1タイトル。	小説：410タイトル。ノンフィクション：2タイトル。7月末現在、毎月約20作品の新刊を発売中。	小説：3タイトル。趣味・娯楽・実用：1タイトル。
デジタル書籍に関してご意見を伺えますか。	当面、デジタル書籍は単行本が新書や文庫になった後の新しい商品としての位置を占めると思います。あるいは海外にいる方々がリアルの本を手に入れるコストや手間を省くものとしても利用されるでしょう。ネットワーク上のみ書籍も考えられますが、紙とネットワークは対立するものと言うよりは補い合うものと考えています。それぞれのメディアの長所を活かし、読者のニーズに応えられればと思っています。	光文社電子書店では、「いつでも、どこでも、どなたでも」本をお楽しみいただきたいと考えています。音で聞く「FDブッククラブ」や、携帯性に富んだ電子本「ザウルス文庫」などはこれらの一例です。紙のノウハウを発展させてデジタル書籍に反映させる。逆にデジタル書籍が紙に反映させる。このように、各々の特長を活かした「紙と電子の融合」が、出版側にも読者側にも一番メリットがあることだと思います。	書籍そのままのデジタル書籍も、安い・早いだけのデジタル書籍もいずれ衰退するが、とりあえずは、ここから出発してみよう、経験を積むことが大切ではないでしょうか。
御社の社員1人に対するパソコン台数は何台ですか？	0.8台	0.3台	1台
御社は「専用線」でインターネットにつなげていますか？ Yes / No	Yes	No	Yes
全社員がインターネットを利用できる環境ですか？ Yes / No	Yes	No	Yes
デジタル書籍を扱う専門の部署はありますか？ Yes / No 部署名 :	Yes。部署名：マルチメディア事業局デジタル事業統括部	Yes。部署名：デジタル制作室	Yes。部署名：電子出版部

小学館新潮社文芸春秋マガジンハウス



小学生を対象とした学年別学習雑誌に始まり、現在では幼児誌から一般誌まで雑誌の領域を拡大する一方、書籍部門でも絵本、図鑑、辞典、百科事典などを発行する総合出版社。「人生の中で大きく実となり花開く種子をまく」という出版理念のもと、現在、雑誌70点、書籍4500点、コミックス5700点を発行している。



「週刊新潮」「FOCUS」などの人気雑誌はもちろんのこと、単行本、文庫本なども充実している。また、97年に創刊された「Web新潮」は、一般のホームページとは一線を画した独自のコンテンツに定評があり、この「Web新潮」と連動して生まれたCD-ROMシリーズ「Web新潮Library」も、数多くの読者から支持を得ている。



ユニークな発想、緻密な取材に裏付けられた表現力豊かな記事には定評のある出版界の老舗。主な定期発行物は「文芸春秋」「オール讀物」「文學界」「週刊文春」「諸君!」「別冊文芸春秋」「クレア」「ナンバー」「本の話」など。また、単行本、文庫、全集、ビデオなどの刊行物も充実している。



「アンアン」「クロワッサン」「ハナコ」「ポパイ」「ブルータス」「ダカーボ」「オリーブ」「ギンザ」などの定期刊行物11誌のほか、ムック、書籍も多角的に出版している。常に時代を先取りし、その鋭い感性と独自の着眼点から生み出される記事には定評がある。それまでになかった、オリジナルティあふれる雑誌作りを目指している。

していません。	していません。	現在は販売していないが、検討している。デジタル書籍コンソーシアムに参加しているし、電子書店の開設についても社内でも話し合っている。	いいえ
将来こういう方向になっていくと思う。	技術的なハードルが年々低くなっていますので、このような動きがあるのも当然かなと思います。	当然の展開だと思う。	点数は増えても売上は上がらない出版の状況を考えると、硬直化した流通に風穴をあける意味でデジタル書籍を試す価値はある。
流通在庫コストの削減。	在庫を持たなくてよい、絶版がなくなる、というところでしょう。	リスク、スペース、コストの軽減と、新規読者の獲得が期待できる。物流の制約からの解放も大きい。	制作コストや流通コストが削減される。
単価の減といつでもどこでも読みたい本が手に入ること。	いつでも気が向いたときに、どこにいても購入できることでしょうか。	絶版がなくなり、欲しいときに欲しい本が買える。入手までの時間が大幅に短縮できる。わざわざ本を買いに出かける必要がなくなる。書棚のスペースに悩むこともなくなる。	本がすぐ手に入る。コストも下がる。
Yes。 (ただし一部の書籍。リファレンスもの、辞書他)	No。 (ただし、辞書の分野についてはあり得ると思います)	No。 むしろ履み分けが進むのではないかと、たいていずれ電子本のウェイトが高くなるかもしれない。	No。 「交代」せず「並立」すると思う。
リファレンスものと雑誌。	データベースとしての性質を持つ辞書・事典は、デジタル書籍に向いています。その場合、書籍としての体裁は基本的に不要であり、必要な項目に素早くたどり着く工夫がなされていけばよいと思います。それ以外の出版物については、本という形態に密着に結びついて発展してきたものから、デジタル書籍においてもその形態をできる限り模倣するのがよいと思います。	従来の書籍では実現できなかったことを、少しでも実現することが基本だと思う。文芸系なら、全集、選集などの物理的にかさばるもの。あるいは、短編、詩集など、分量の少ないもの。また語学書や参考書などの付加機能を利用できる内容のものも向いているのではないかと。	学術書、実用書。
通信料金。	具体的にやっていないのでわかりません。	通信速度と通信コストの問題が第一。ついでコピープロテクトの問題も厳しい。	データを軽くするには、文字のみで構成された書籍がベストであること。コピーフリーの状態になるため、著作権の配慮がむずかしいこと。モノを見て買うシステムと違うので、事前に商品の情報をどのように流すかが問題であること。旧字・外字など特殊文字を表示するのが難しいこと。
(CD-ROMでのみ販売)	ありません。	現在は販売していない。	なし。
無回答	デジタル書籍は、ある程度普及してくれば、必ず既存の紙の本の制作・流通システムに影響を及ぼします。逆に影響を及ぼすくらいではないと、普及したことはありません。しかし、既存のシステムに対する打撃を、仕方がないと言い切っているのか、出版界全体に対してどのような波及効果と及ぼすのかについての議論があまりなされていないように思います。技術的にできるということと実際にやるということの間には大きなハードルがあると思うのです。	紙以外の媒体で本を読むことを、ユーザーが受け入れてくれるかどうかが当面の問題だが、「欲しい本が本屋で買えない」「注文してもすぐ手に入らない」という従来の読者が抱いていた不満を解消できる可能性に期待している。新しいスタイルのデジタル書籍が生まれる可能性もあると思う。	本の価値を情報と限定するならば、紙と交代することも可能だが、モノとしての本の楽しみは消えないと思う。ただ、情報伝達が目的の本もあるため、まずは学術書や実用書などに着手すればいい。いまのコンピュータでの読書は苦痛だが、毎回印刷するのも面倒なので、使い勝手の良いビューワーは必要。もし薄くて軽い折り畳み式のビューワーができれば、小説を読むことも可能だが、ハードとしていまの本以上の使い勝手が見込めなければ、一般化は難しい。
1台	すべて無回答	まだまだ少ない	0.8台くらい
Yes		Yes	Yes
Yes		No	Yes
No。 (ただし電子出版を扱う部署あり)		検討中 (おそらく専門の部署ができるだろう)	No

インターネットで手に入れられるサイトを紹介

いますぐデジタル書籍をダウンロード!

すでにダウンロードするデジタル書籍は流通している。1冊数100円というものから数千円のものまで幅広い。しかも、統一的な規格がないため、テキスト、エキスパンドブック、PDFなどさまざまな形式で配布されている。確かにタイトル数も少なく魅力的なコンテンツは豊富ではないが、静かなブームはますます拡大するはずだ。

- Biz - Today

電子書店パピレス



KJump www.papy.co.jp

株式会社フジオンラインシステムが運営するデジタル書籍専門店。小説、ノンフィクション、趣味・娯楽・実用、写真集、コミック、雑誌の5ジャンルが用意されている。また18歳以上であれば、アダルト書籍も購入できる。タイトル数も多くさまざまな人が楽しめる本格的な品揃えになっている。

代表的な書籍 ウォールデン/ソロ、クリントンスキャンダル毎日新聞社、ペーパークラフト/二玄社、宇宙戦艦ヤマト/松本零士、InternetWatch/インプレス

支払方法 ニフティサーブ、BIGLOBE、Smash、Web Money、QQQ、アコシス、NET-U、クレジットカード

光文社電子書店



KJump www.kobunsha.com/kappa

出版社で唯一、デジタル書籍に本格的に力を入れているのが光文社だろう。現在、販売されているデジタル書籍の数は、10ジャンル400タイトルを超えている。基本的には同社の文庫シリーズからの転用が多い。コンテンツはテキスト形式なので、ダウンロードしてさまざまなビューワーで読めるのがうれしい。

代表的な書籍 探偵物語/赤川次郎、処刑軍団/大藪春彦、俺は秘密諜報員/胡桃沢耕史、他殺呼/笹沢左保、Wの悲劇/夏樹静子

支払方法 ニフティサーブ、BIGLOBE、シャープスペースタウン

マガジンプラザ



KJump <https://www.nifty.ne.jp/mplaza/>

PDFで作られた地図やガイドなどの有効な情報が手に入れられるニフティサーブ内に設けられたサイト。コンテンツはダイヤモンド社の「全上場会社組織図要覧1998」や東京地図出版の「ミリオンマップ東京23区・横浜・川崎市街道路地図」など実際に紙で販売されているものを1ページごと提供している感じだ。

代表的な書籍 関東周辺遊園地ガイド最新版/山と溪谷社、全国ゴルフ場ガイド1997関東・近畿編/ゴルフダイジェスト社

支払方法 ニフティサーブ

グーテンベルグ21



KJump www.gutenberg21.co.jp

東西の古典や名作を中心に集めたサイト。欧米文学のものが多く、興味深いのは「原書文庫」という英語の原書をテキストでダウンロードできるものだ。日本語訳と原書を同時に買って見比べるというようなことができる。ほかにも、グリム童話などの短編を1つか2つを読みたい人向けの100円文庫がある。

代表的な書籍 シャーロック・ホームズの冒険/コナン・ドイル、デカメロン/ボッカッチョ、肉体の悪魔/ラディゲ、変身/カフカ

支払方法 Smash、NET-U、QQQ、Webmoney、ビットキャッシュ

ピーノ電子本センター



KJump www.pastel.co.jp/pino

前出の「グーテンベルグ21」を始めとして、いくつかのデジタル書籍を扱っている会社のコンテンツを販売している。中島らもの未出版作品など、ほかではみつからないようなデジタル書籍を販売しているのが特徴。価格面では不満が残るが、興味がある人は覗いてみるべき。

代表的な書籍 こどもの一生/中島らも、W・モーガン誘拐殺人事件/徳広ゆう子訳、モデルヴィンテージ(雑誌)/キャットウォーク出版

支払方法 NET-U

ComKet



KJump www.infoket.or.jp

NTTのInfoketというインターネット上でデジタルコンテンツを安全に確実に販売するための決済方法を使ったサイト。置いてあるコンテンツも通常のサイトでは手に入れられないような、「通信白書」や「NTT技術ジャーナル」といったものもあれば、小説なども用意されている。一味違ったものを求めたい人におすすめ。

代表的な書籍 世界週報バックナンバー/時時通信、Jリーグ選手名鑑/日刊スポーツ新聞、誰でもつなげるインターネットISDN接続編/NTT出版

支払方法 Infoket

コンテンツパラダイス



kJump conpara.topica.ne.jp

凸版印刷が運営するコンテンツパラダイス。デジタル書籍が中心というよりも、さまざまなコンテンツを寄せ集めたサイトだ。さまざまな出版社が積極的に参加しているので中身も粒ぞろい。

代表的な書籍 素晴らしき臓器工場/家城久子、精神分析殺人事件/アマンダ・クロス、世界昔ばなし/日本民話の会

支払方法 BitCash、NET-U、BIGLOBE、ニフティサーブ、Internet Cash

週間ダイヤモンド



kJump dw.diamond.ne.jp

週刊ダイヤモンドでは、定期購読者ならば過去の記事をタイトルで検索してPDF化されたものをダウンロードできるようにしている。紙の雑誌とインターネットをつなぐ試みといえるだろう。

代表的な書籍 週間ダイヤモンドバックナンバー

支払方法 バックナンバーの申し込み

Web新潮



kJump www.webshincho.com

「Yonda?」でおなじみの新潮社のウェブサイトがこのWeb新潮だ。少数だがデジタル書籍もダウンロードできる。ウェブサイト単体だけでも十分な情報量を持っていて読み物として楽しめる。

代表的な書籍 99人の最終電車/井上夢人、神々の黄昏/松本零士、人間の壁/石川達三

支払方法 なし

平井和正ホームページ



kJump www.wolfguy.com

人気のSF作家「平井和正」のオフィシャルホームページ。ここでは、デジタル化された氏の著書を買うことができる。紙の書籍では読めない著者コメント付きなのはファンにはうれしいはず。

代表的な書籍 月光魔術團、ウルフガイシリーズ、地球樹の女神シリーズ

支払方法 アコシス、Smash、ビットキャッシュ

シャープスペースタウン「ザウルス文庫」

kJump www.zaurusworld.ne.jp/menu/bunko/index.zhtml

ザウルス用のデジタル書籍コンテンツを販売している。現在のところ出展者は前出の光文社のみ。まだの人のために、無料お試し本も用意されている。ザウルスユーザー必見。

代表的な書籍 三毛猫ホームズの推理/赤川次郎、香港破壊作戦/大藪春彦、それゆけ孔雀警視/志茂田景樹

支払方法 シャープスペースタウン・インターネット情報サービス会員



シャープのザウルスでデジタル書籍を読む（パソコン用が必要）。パソコン用は写真のアイゲッティMI-P2を始めとする9機種で動作する。必要なメモリーサイズは190KB程度。

いま問われる新しい本の役割

専門書を扱うひつじ書房。この出版社の動きが次の出版ビジネスを示唆しているかもしれない。代表取締役の松本功氏は言う。「米国にはニューヨークタイムズブックレビューのような専門家がいうきちんとした書評があるが、日本にはこれがない。正しい書評があってこそ、本が持つ真価が明らかにされるのだ。さまざまな情報がインターネットで手に入るのに、ヤフー！などで書評について検索してみたが見

つからなかった」1997年の話だと言う。すでに広がりを見せていたインターネットだが、こと本の評に関してはまったくと言っていいほど見つからなかったと語った。こういった不満から彼はパズール方式でさまざまな人が自由に本をレビューできる「書評ホームページ」を立ち上げた。書評をデータベース化することによって、本の情報に誰もがたどり着けるようにするのが目的だ。

ひつじ書房 松本 功氏に聞く

こういった活動によってインターネットと本がつながっていくのだ。彼はこれと呼応させるように埋もれた「テキスト」を発掘するための「投げ銭システム」を始めている。「本は国を作り、家族を崩壊させた。しかし、本はその罪をつぐなうべく新しいコミュニケーションツールとして生まれ変わるべきだ」とインターネットが創る次の時代の「本」の役割について彼は力強く語った。

書評ホームページ
kJump www.shohyo.co.jp



ルネッサンスパブリッシャー宣言
松本 功
ISBN4-89476-102-5
定価 2,200円

バザール方式によるデジタル書籍の流通 インターネットの電子図書館 「青空文庫」が目指すもの

複製という観点から見れば、デジタルコンテンツを分配するためのコストはほぼゼロに近い。結果として、デジタル書籍の持つ価値はそこに書かれた「文字」でしかなくなる。富田氏はその「文字」をデジタルデータに加工することによって、「知を公共の財産」とするために、電子的な図書館と呼べるものを作り上げた。 文：富田倫生

「売る」のではなく「配る」のは
インターネットの本質だった

青空文庫は、インターネットを利用した無料公開の電子図書館だ。

著者の死後50年を経て著作権の切れた作品と、著作権者が「タダで読んでもらってかまわない」と決めたものを集めている。

インターネットを利用すれば、図書館のような仕組みを、きわめて安く、しかも物理的な制約の多くをすり抜けて実現できると本気で考え始めたのは、1997年の初めだった。エキスポブックという電子本への関心を通じて知り合った仲間4人で準備を進め、同年の9月に開館にこぎ着けた。

当初は自分たちだけで、本来の仕事の合間を縫って作業し、5年、10年かけて100冊程度公開できればいいだろうと、その程度の気持ちでいた。ところが協力を求める文書を掲げておくと、「手伝おう」と名乗りを上げてくれる人が続々と現れた。この原稿を書いている1999年8月初めで、青空作業員と呼んでいる協力者は、延べ160人を、収録作品は600点を超えている。

青空文庫を準備した我々には、1990年代の初頭に電子本が現れた時点でこれに興味を持ったという、共通の過去がある。

ミニコミを作ってきた者は、かつてのガリ版のような身の丈にあったメディアが、力強く生まれ変わったと感じた。書き下ろし文庫で『パソコン

創世記』という初めての本を出したものの、出版社の文庫からの撤退で、出たばかりの本を断裁された経験を持つ私は、これで幻のように消えた本を作り直せると思った。

私たちは最初から、図書館を意識していたわけではない。電子本を発見した時点では、本を売るという選択肢と配るという選択肢を共に持っていた。その我々に、配るという道を選ばせたのは、インターネットの本質だったのだと思う。

無料で公開されていたものが
1つの意思を持ち始める

『パソコン創世記』を電子本として作り直すにあたっては、紙で出したのちの動きをカバーする、後書きを用意しようと考えた。これがどんどん長くなり、2年近くも執筆にかりつきりとなるあいだに、インターネットが急速に広まった。私がテーマとして取り上げているコンピュータ史の当事者が、自分のページで体験を語り始めた。電子本として書き上げた『パソコン創世記』から、私は彼らの証言にリンクを張った。この作業を続けるうちに、インターネット上にはリンクを媒介して「コンピュータの歴史を記録しよう」とする、1つの意思のようなものが育っていると感じるようになった。と同時に、身の置き所がないような感覚もまた、私の中にわいてきた。私の売り物からリンクが張れたのは、該当の証言がすべて無料で公開されていたからだ。やがて、自らの言葉もまた大いなる意思の一部としたい



www.aozora.gr.jp

基本的に著作権の切れたものが前提となるので、芥川龍之介や森鴎外、夏目漱石といった教科書で親しんだ作家が多い。インターネットマガジンのには山形浩生訳のエリック・レイモントの論文がおすすめ。もちろん、富田氏の著書も読める。

という誘惑にさらされた。『パソコン創世記』もまた、インターネット上で公開するしかないのではないかと考えるようになった。

「知は公共の財産」という
地球規模の「おおよけ」を育む

インターネットに本を移して劇的に変わるの、複製と移動のコストが一気に減少する点だ。電子本を商品として売れば、この特長は半分しか生かせない。勝手にコピーされて撒かれるのではないかと不安が、どうしても残る。一方、「どんどん読んでもらうことこそが目的」と腹がくくれるなら、強みは100パーセント引き出せる。ポイントは、「知は公共の財産である」といったスタンスが取れるか否かにかかる。そうした枠組みが設定できたとき、どれほどの力が引き出せるかを、Linuxの成功は雄弁に物語っている。青空文庫も、そのひそみにならいたい。

無償での提供を実現するために、私たちは現時点で、少し無理もしている。だが、ともかくも自由に利用できるファイルを豊かに整えることで、「あいつらがいてくれなくては困る。寂しい」と思われる、社会の一要素になりきってしまいたい。

そうした「おおよけ」を目指す志には生きる場所がないというのなら、いつか私たちは消えるだろう。それでも、自由に使えるファイルだけは何点が残る。もしこの社会が私たちに居場所を与えてくれるなら、共用できるファイルはどんどん増やせるに違いない。

エキスパンドブックからT-Timeへ テキストの旗手 ボイジャーの昨日・今日・明日

モニターでテキストを読む。日常の何気ないことかもしれないが、果たしてそれは「読んで」いるのだろうか。モニターに映し出されるドットの集まりとしてのテキストは、真剣に「読む」という行為からわれわれを遠ざけているのではないだろうか。が、ボイジャーはデジタル化されたテキストを見事に「読める」ようにしたのだ。
文：富田倫生

「読む」ためのデジタル書籍 エキスパンドブックの開発へ

紙に比べて、解像度の劣る現行のディスプレイで文字を読ませることに、基本的に無理がある。複製や移動のコストを激減できて、在庫の負担を求めないというメリットがあったとしても、なんとか読むにたまるものに仕立ててやらない限り、デジタル書籍の可能性は現実には花開かない。

「デジタル書籍を読めるものにする」という、このかなりやっかいな課題をこなす上で、ボイジャーは大きな役割を演じてきたと思う。

もともとボイジャーは、レーザーディスクでマルチメディアの可能性を拓こうと、アメリカで生まれた会社だった。この試みに、技術の開発元であるパイオニア側に籍を置いていた萩野正昭さん率いるチームが共感し、兄弟会社を日本に起こした。その時点で米ボイジャーは、コンピュータ上のデジタル書籍という新しい目標を選び取っていた。

当初彼らは、マッキントッシュのハイパーカードをそのまま利用し、本のページ風に仕立てたカードに文章を流し込む仕掛けを用意して、Expanded Bookと名付けた。これが日本語化され、「エキスパンドブック」の名称で発売された。

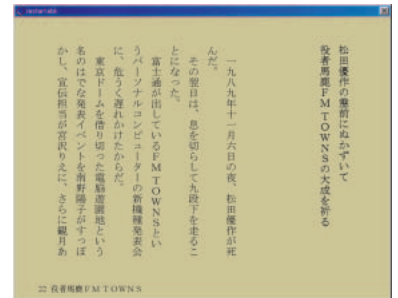
初代のエキスパンドブックは、横組みのみで、表示文字も何の変哲もないものだった。その後、ハイパーカードの拡張コマンドを利用して、縦組みも試みられたが、制約が大きく、ウィンドウズにも対応できなかった。

日本チームの開発の中心となっている祝田久さんは、そこでハイパーカードを離れ、まったく新しい環境をゼロから作り直す道を選んだ。1995年に誕生した新生エキスパンドブックは、縦組み、横組みの双方に対応し、文字の輪郭線に沿って、背景と文字の中間色を配置するアンチエイリアスを施すことによって、文章の読み心地を大幅に改善させた。

コンピュータのための「本」を T-Timeが生み出した

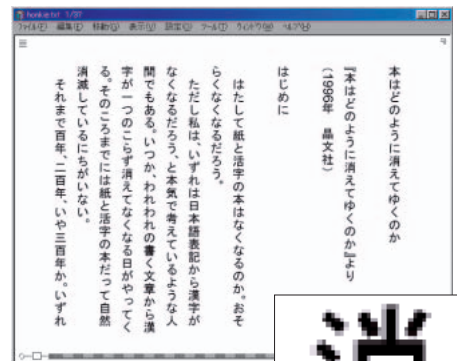
このデジタル書籍開発の成果を引き継ぎながら、ボイジャーはいま、「T-Time」と名付けた新しい読書環境を提唱している。エキスパンドブックを作ったとき、彼らの頭には、紙の本という雛形があった。だが、T-Timeにはもう、本のイメージはない。アンチエイリアスされた文字を、ページめくりで読むところは同じだが、画面のサイズは自由に設定できて、縦組み、横組みも一瞬に切り替えられる。フォントの種類やサイズも、即時に変更できる。流し込む文章が選べて、仕立ても思うままに設定できると、作る側ではなく読む側に、全面的に決定権が委ねられている。

インターネットの普及以降、私たちは、電子メールやウェブページからあふれ出すテキストの洪水を浴びるようになった。読むべきテキストは、居住まいを正して雑誌や本に収まっているものにとどまらない。長短、硬軟、公私のさまざまな揺れ幅を持ったテ



エキスパンドブック

本のようにページをめくる感覚を与えてくれる。専用のビューワーは無償でダウンロードできる。



T-Time

行間や字間、縦組みや横組み、フォントフェイスタイプやサイズを思いのままに変えられる。フォントにアンチエイリアスをかけることもでき、これによってコンピュータ上で「読む」ことを飛躍的に向上させた。テキスト、HTML、エキスパンドブック、T-Timeといった複数のファイル形式に対応している。

価格：3,400円（書店版）3,900円（パソコンソフト版）、無償の機能限定版あり

www.voyager.co.jp/T-Time/

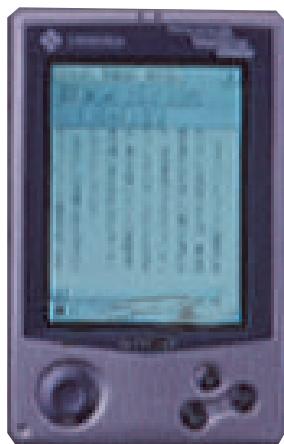
消え

キストが次々と生まれ、読まれることを待っている。いったん誰かが本に作り込んだ文章を読ませようとするエキスパンドブックから、電子メールやウェブの文章を即座に取り込んで表示するT-Timeへの移行は、読むことを巡る私たちを取り巻く環境の激変に対応していると思う。

紙のプリントから液晶表示へ 「テキストを読む」ための デバイスに求められるもの

デジタル書籍の出現は、紙にプリントされたテキストではなく、モニターや液晶画面に映し出されたテキストを読む行為に我々の生活を移行させる。ならば、デジタル化された本を読むためのデバイスに求められるものは、紙以上の特性を持っていなければならない。これを突き詰めていけば、本の持つ「本質」が見えてくる。

文：萩野正昭 / 株式会社ポイジャー



マイクロキャビンのウィンドウズCE用テキストビューアー「ブックリーダー」。縦書き表示や画面の倒置ができる。フォントの大きさや行間の変更、ルビ表示までできる。
価格：1,000円

▶ www.microcabin.co.jp/more/ce/bookreader

3通りしかない配布方法で
本は読まれることを待っている

書かれた本はただ読まれることを待っている。なのに読みたい人とうまく出会えない。

「読まれる」とは、人に実物の本を届けるのが、実物が存在する図書館に人が通うのか、人へコンピュータを使って内容を送るかの3通りしかない。実物の本を届けるなんてことがうまくいくはずないことは十分経験をした。品切れという事実上の絶版には常にでくわす。amazon.comが書店に代わって注文を代行する時代だ。図書館へ通うのはいいが遠方では困ってしまう。だいたい図書館で読書できる人なんて限られてやしないか。

本を届けるのは商売だから、儲かりそうもないものは出ない。儲からなかったものは回収され廃棄される。つまり儲からない本は読まれる機会を失うようになる。この現実、書かれた本はただ読まれることを待っていることとは無関係に生じる。

3通りの中でコンピュータを使うのは読める環境を与えるということでは今後もっとも発展すると思われる。コンピュータは本という形から脱却して単に読むという行為に基づいた環境をみている。読むという内容を送る

のであって、形や定まったデザインを送るのではない。その人の読み環境が大型モニターなら大きく、携帯端末なら小さく、文字は自由にその人の読みやすい大きさに変えられ、プリントするなら自分で、あるいは簡易製本を委託してもいい。読み上げを必要とするならば定評あるソフトと連動させる。このように形はその人その人が決めることによって快適さは届けられる。

多様な形状、高額な値段では
本の本質を見逃してしまう

読書専用端末もコンピュータだといふべきだろう。ウェアラブルから名刺大になるだろうくらいは何となく想像がつく。ここでは端末と手の関係がくせ者になる。最低限片手ですべて操作できるべきだろう。いまある携帯端末はこれができない。無理に片手で持っても、落としてしまえば5万円の損失になる、怖い「本」だ。スリラーにならないために端末は5,000円以下であるべきだ。

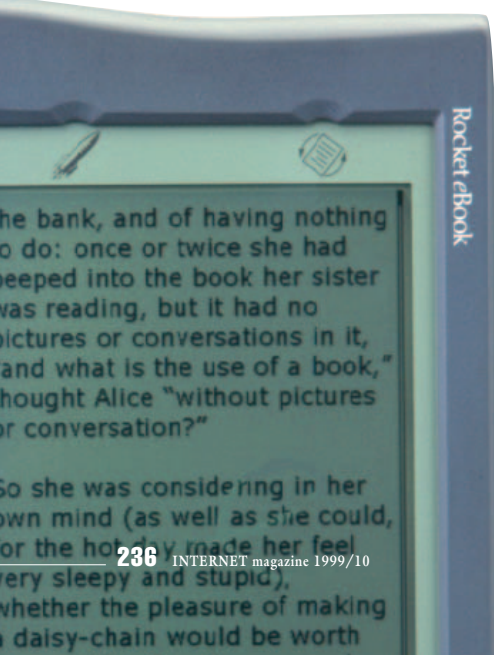
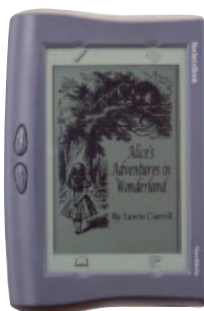
読書専用端末も当然、形から脱却して単に読むという行為に基づいた環境をみている。読書専用端末だけの判形を考えようとしたりする人がいる。読書といえば本、本とくれば文庫判、四六判くらいしか想定していない。とんでもない。形にこだわれば再び読めない本を生むだけだ。アレ用、コレ用などと特殊なものを送り出すべきではない。数年後にはみんな読めない廃材となる。

読書専用端末をはじめとするコンピュータの環境がバラバラなだけなのだ。本のせいではない、書かれた本はただ読まれることを待っているだけだ。ソースは共通、あくまで1つ、それが本だ。

忘れてならないのは、本のソースとはただ単純なテキストデータへの打ち込みあるいは変換ということだけなのだ。ローテクを使って、かつローテクであるが故に今後も変わることのない確実性の上に、人があらゆる機会に「本」を読むことができる。一番単純で一番容易で一番経済的なことだ。誰でもできることなのだ。何を難しく考えているのか。

ニューヴォメディアの携帯型デジタル書籍端末「ロケット・eブック」。インターネットからダウンロードした専用フォーマットのファイルをPCから転送して使う。文字のサイズや画面の向きの変更、文字の検索ができる。表示は英語のみ。
サイズ：5×71/2×11/2（インチ）
解像度：106dpi
価格：349ドル

▶ www.rocketbook.com



グーテンベルグギャラクシーの次に来るもの

インターネットが作り出すデジタル出版の行く末

この1000年の一大トピックがグーテンベルグによる印刷だとすれば、人間は500年ものあいだテキストの呪縛に縛られてきたのだということに改めて気が付く。この呪縛を引きずっているのは、何を隠そうインターネットだった。しかし、コンピュータの持つ本質は紙の特性を超えることにある。これを越えたとき次世代の本が見えてくる。

文：浜野保樹

▶グーテンベルグの銀河系に インターネットが擦り寄る

アメリカの写真誌『LIFE』が決定した、このミレニアム（千年期）の最も重要なできごとの第1位に選ばれたのは、グーテンベルグによる聖書の印刷だった。グーテンベルグの印刷術がなければ『LIFE』もなかったわけだから、当然の結果かもしれない。ちなみにコンピュータもインターネットも100位の中には入っていない。

最初の大量生産品でもあった印刷された書籍は、知識の開放をうながし、社会を変えた。そして次の千年期の終わりには、最も重要なできごとがインターネットによって本が消えたということにもなりかねない状況が生まれつつある。グーテンベルグの印刷術がもたらしたのは、情報が作られてからのシステムだったが、インターネットは情報の生成そのものも変え、マーシャル・マクルーハンが言うところのグーテンベルグギャラクシー（グーテンベルグが生み出した体制）そのものを変えようとしている。しかし、現在はグーテンベルグギャラクシーにインターネットを合わせようという努力が行われている段階である。

▶本の持つエレガントさを 異なるメディアに変えるのは困難

まずはamazon.comによる書籍流通の革命から始まった。いまはさらに次の段階に移行しようとしている。これまでにも、直接的にデジタルデータを何らかの形で流通させて、特定の端末でPCで読んでもらうという

試みはないわけではなかった。しかし、端末の価格や能力の制限、データ流通経路の未整理などによって、ことごとく失敗してきた。しかしインターネットの登場によって、データの流通については決着がついた。さらにインターネットが追い風になってPCも急速に普及している。このため、著作権の切れた古典のデータを無料で提供する試みから始まり、書籍のデータを販売するサイトが次から次へと現れるようになっていく。

返品や在庫を抱えることなく、読者に直接コンテンツを販売できるこういったシステムは、書籍のデータが映像や音声に比べて小さいことも手伝って、出版社の救世主のはずである。しかし技術的にできることも制度的にできるとは限らないし、データを安価に届けることはできても、いまのPCでは快

適に読むという行為からほど遠い。つまり、一覧性に優れ、解像度と携帯性に優れ、読む場所を選ばない、1000年以上に渡って磨き抜かれたエレガントきわまりないインターフェイスを持つ本というメディアによる行為に変えることは至難の業である。

▶本当のデジタル出版の確立は 映像中心の「本」を生み出す

1つの解法は、本にそんなに慣れてしまっているなら、できるだけ本に近づけてみるのだ。できれば本そのものにしてしまう。アメリカの書店ではインターネットで送られてくるデータを数分で本の形態にしてしまうサービスが始まっている。あるいは、ポイジャーの「T-Time」やアドビのPDFのように、PCの画面表示を本に近づける。あるいは、アラン・ケイが夢見ていたようなダイナブックや『2001年宇宙の旅』のニュースパッドのような本とほぼ同じ形状と操作性の端末を開発する。その端緒がeブックなどで試みられている。

全文検索など、機能面ではデジタル出版のほうが優れているところが認識されつつあるが、本の代替を目指す限りにおいては、本の良さを越えることは今の技術では不可能だろう。それは「インターネットマガジン」をあいかわず紙の雑誌で読んでいることからわかる。メディアの歴史の教訓から言えば、デジタル出版が本の形式と決別したときが、本当のデジタル出版が確立されるときだ。しかし、本当のデジタル出版が確立したときには、流通しているものは文字よりも映像が中心になっている可能性は高い。



LIFE Millennium Top 100 Events
www.pathfinder.com/Life/millennium/events/oi.html

LIFEが選んだこれまでの1000年に起こったできごとのトップ100。1位はグーテンベルグによる聖書の印刷が選ばれた。ちなみに、2位はコンプスの新世界発見による「グローバルな文明社会」、3位は「ルターの宗教改革」であった。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp